

# ニッポン発二一世紀オリジナル

「三代代平等型長寿社会」の達成

堀 亜起良

元『知恵蔵』編集長 堀内正範

はじめに

## 世界の宝石鉱脈としての日本

二一世紀の日本は？

「だれにもわかつちやいねえよ」

と即座に勝安房なら吐き捨てるようにいい、

「次の世紀に向かって話しかけなされ」

と熟慮して万札先生ならおだやかにいます。

ややあって、

「ニッポンは世界の宝石鉱脈である」

と無名の東洋哲学者堀亜起良は臆せずにあります。

なぜとって、はるかな遠い日に、東に向かった文化の波は漢・韓を通じて日本に達して開

花し、西に向かった技術の波はローマ・西欧・米国を経てはるかに遠い日本に至って開化したからです。たどりついて開花・開化しなかった数多くのものは、この島のどこかに埋もれています。それらは宝石鉱脈となつて深く浅く横たわっているはずですが。ご承知のように、わずかな特例のほか、この国からは西へも東へも出て行つた形跡がないからです。

本稿からしてがまずその証です。

「漢字かなカナROMA字まじり」の日本語は、世界の文化を撚り合わせ凝縮して総合していますし、衣・食・住の日用品のありようは、世界の技術の長所を融け合わせて統合を示しています。いまや東方にも西方にも、パーツ・アンノウン（知られざる地）はどこにもなくなりました。陸からも、海からも、空からも、最終便は着いてしまったのですから、もはや待つていても何もやつてこないのです。

そんな溜め込み状況は、日本人なら見て、聞いて、触れて、気づいていること。

そこで、歴史と現代の短い風のタイムラグを見定めたくえで、今、

「ニッポンは世界の宝石鉱脈である」

という二一世紀の歴史を予測するフレーズが、ここに日本語オリジナルで記されることとなりました。臆せずにいえるのは、子午線と卯酉線を重ね合わせて、二一世紀初頭の世界を航空写真のように仔細に観察したうえで、いちはやく確認したのが本稿だからです。

今世紀の初頭から彗星のように輝きを増しながら姿を露わにしているモノがありヒトもおり

ますが、多くはなお原石のまま折り重なって呼び出し庄之助の声を待っています。これからそれらの原石の一つひとつを揺り起こして掘り出して磨きあげて輝かせるのは、外でもない一人ひとりの日本国民の力です。

しずかに前世紀にまで思いをいたせば、世紀の前半に帝国主義が起こした二度の世界大戦は、世界各地に未曾有の戦禍をもたらしました。最大の戦禍である広島・長崎の原爆投下を含む形状がたい大小の傷跡をこの国の各地にもたらしました。

各地の焦土に立った先人は、

「国破れて山河あり」（杜甫の詩「春望」から）

の思いを胸に刻み、「封建的」なるものをそぎ落として過去と決別し、未来の世界に向かって戦争放棄を訴える「憲法第九条」を掲げ、みんなして焦土と化した国土の復興に邁進したのでした。貧しさをともにし、豊かさを等しく分け合って、前世紀の後半には歴史に希れな「九割中流」という「近似大同社会」（夜、戸を閉ざさず）をなし遂げました。この誇るべき経緯については後の章で詳しく述べたいと思います。

そして今世紀の初頭には、平和であることの実証として平均寿命を世界一にまで延伸し、だれもが「人生六五年」をはるかに超えて「人生九〇年」を望むことができる長寿国の先駆けとして登場しています。だれもが生涯を通じて「からだ・こころ（こころざし）・ふるまい」のそれぞれが健全であり、安心して過ごせる社会の実現を願って暮らしています。

「長寿はひとりの人間にとつて、そして人類にとつて普遍的な価値である」

と、いまのこの国でならおとなも子どもも実感をもつてそう言うことができず、しかし、だれもがそう思いそうなることを願っているだけでは新たな社会は成立しません。とくにこれまでなかった「高年期Ⅱ円熟期」のためのモノとしくみを新たにつくるのは、そうする知識・技術・意欲をもっている高齢者のみなさんです。そう願うことではじめてこれまでどこにもなかった社会、「青少年Ⅱ成長期」「中年Ⅱ成熟期」「高年Ⅱ円熟期」という「三世代・三期」の人びとが平等に過ごせる社会が成立します。

三世代それぞれの代表が集つて、いまある青少年期を語り、過ぎこし青少年期を語り、中年期を語り、いまある高年期を語り、将来あるであろう高年期を語り、議論を尽くして三世代・三期のしくみをもつ世界初の「日本型長寿社会グランドデザイン」を構想することになります。そして恒久平和をめざす「憲法第九条」とともに、「三世代平等型長寿社会」の旗幟を明らかにして東アジアの空に高く掲げて、みんなして一人一つのかけがえのないわが人生の達成をめざすことになります。

#### **\* 一生に四度行ってみよう**

一人一つのわが人生の達成へむかう足下の一步は、三世代のみんながそれぞれの足元にしっかりと印すこと。みんなして努めて着実に達成にむかうこと。この晴れやかな自作自演のステ

ージは、これまでになくまたとない史的舞台です。五大陸からの五彩のオリンピック・ライトを浴びて、ヒノキ舞台に立っている主役はといえ、長くワキ役だった高齢者のみなさんです。

いま九〇歳まで生きる人の割合は男性二五・〇%、女性四九・一%です。女性はいやでも半数が九〇歳人生を過ごすのですから、どういう成熟期・円熟期を過ごすかの工夫が若いときから大切です。こんにやく・ダイエツトなどもつてのほか。

「平均寿命」は女性が八七・〇五歳、男性が八〇・七九歳。介護支援を受けずに生活に支障がないという「健康寿命」の延伸も着実につづいています。

そうです、一〇〇歳に達して寝たきりになっても人生を楽しむ姿勢を持ちつづけること。朝、一杯の暖かいスープを美味しく飲んで。

だれもが「人生一〇〇年」の人生を目標にして過ごすことができるためには、三世代それぞれに便利な居場所や通い場所やモノやサービスを整える必要があります。とくに三四〇〇万人の高齢者（六五歳以上）が第三世代として登場して、円熟した演技をみせることができるための舞台づくりは、舞台裏での作業をいとわないフロンティアとしての高齢者が負うこととなります。平成と後の世代への贈り物として。

世界大戦のあと、半世紀の舞台づくりは、明治や大正生まれの先人がフロンティアとして食と衛生と医療と暮らしを便利にするモノと安心して休息を得られる住宅とを整えてくれて、その上で昭和のみんなのたゆまぬ努力が総合してもたらされたものでした。平成生まれの人びと

は、先人が残してくれた木の樹蔭に憩えることに敬意を失ってはいけないでしょう。

なによりも重要だったのは、いうまでもなく「食」です。食の充足がすべてに優先しました。

幸せにもわが国の「食」は、MADE IN JAPANの優良加工製品の対価として世界中からもたらされて、飽食といわれるほどに満たされてきました。いまや首都東京の街筋には国際色豊かなレストランが競って店を開いています。夜になればミシュランの星もたくさん輝いて。

「和食」は世界文化遺産に登録されて、訪れる観光客の人気のマトになっています。外来の人のびとに「和食」を知ってもらうことは、日本文化の粹に触れることですから大いに結構。

訪れて「日本食」を楽しむのは、観光客ばかりではありません。さまざまな分野の国際会議やセミナーや展示会や大会や姉妹都市・友好都市との交流が常日ごろから各地で催されています。国際空港の近くには国際病院がオープンしていてカルテを預けてやってくるリピーターがいますし、留学生・定住者・移住者も多くなっています。その傍らには優れた知識・技術・品格をもった円熟期の教師や隣人や知人がいて、「おもてなし」をしています。

ここでわが国の特徴のひとつを確認しておきましょう。

天恵としての「四季」があること。

四季折り折りの風物（食も祭りも）と迎える側の「お・も・て・な・し」の心とがあいまつて、リピーターを増やす役割をつとめています。「一生に一度」といわず「四度行ってみたい国」といわれるには、富士の優美な姿や温泉やアキバの品ぞろえもさることながら、地域特有の四

季折り折りの「食とおもてなし」がなによりの吸引力となるでしょう。工夫次第で、狭い日本を四倍にみせる法でもあります。

「はじめに」がことにほか長くなりましたが、「はじめに」のおわりにもうひとつ、毎年北欧の冬を際立たせるノーベル賞受賞式にも触れておきたいと思います。

二〇世紀一〇〇年につづいて二一世紀もなお各分野への貢献をていねいに国際的メッセージとして刻みつづけるなら、「ニッポン発二一世紀オリジナル」の成果として、東亜のこの国から重ねて医学・生理学、化学、物理学、文学の受賞者を輩出していくでしょう。加えて世界の国ぐにの民衆からスタンディング・オベーションを受けながら平和賞を受賞する団体や個人も出てくるでしょう。誇らしい情景です。

そして最後に残されたのが経済学賞です。

本稿がここに掲げる「ニッポン発二一世紀オリジナル」を次々に達成して、世界初の安定した持続可能な経済社会を作り出し、ニッポン発オリジナルの「経済原理」を紡ぎ出さねばならないでしょう。

そのために、大正・昭和・平成期の「今」を生きてきたわたしたちは、みずからが形成しつつある「三世代平等型社会」を確かなものにし、その成果を享受しつつ、次の世代と高齢化途上国の人びとに感謝される「長寿社会」の成功事例を築いているという意識を保持しつつけることとなります。

「二一世紀の日本（ジパング）を磨きあげて世界史に輝く宝島とする」  
とつぶやいたら、江戸生まれの勝さんは、

「それで文句はねえやな」

と行って高笑し、福翁は、

「天は国の上に国をつくれりといえり」

と苦笑しつつ、格差ではなく較差（こうさ）として納得されるでしょう。